

這る、這る、今は這る

近づく岩の尖端……叱ッ……「瞬間」の駭き……

忽ちに過る岩の微笑、さゝめき散る雪の喚聲

呼吸は躍り血は深紅にうたふ

膚に沁みいる雪の節奏！

眸に燃えいる紫外光の亂調！

おゝ鳴りおのゝく若き日の饗宴の大管絃樂！

憧憬と哀観の涙をのせて

永遠のあなたの郷へ、今ぞ

駛る、奔る、一さんに走る！

NOTTURNO

（五行夜曲）

（山宮允氏に）

1. 丘

ぬき足にのりくる風

慕ひよる斜めの陽ざし

ああ かくて佇ちつくしけむ幾その時

悦びゆたかに丘と展ごり

愁ひはなだらに丘とさし臥す

2. 傷心

おどろきて街ちまたにあひし
 さし覗くよき瞳のかづかず
 あはれ夜を流るゝ星のごとし
 こゝろ傷みて趁ひすがれど
 黙示のみ暗にはふるふ

3. ギターを奏きつゝ

ふともどもる水色の灯ひに
 わが搔いく絃いとのまたゝき
 ああ 黄昏たそがれゆけ消えゆけ思ひも音も
 消えゆくところ呼びさまさむ
 まどろみてわれを待つをとめあらば

4. をごめ

つまぐる指のしろきくぼみ
 もの見ぬ眸のみつむる針
 ああ かくてをどめは紡ぐよ幾その憎み
 戀か憎みかなべてはわかす
 君が織る七重のあやに縋れ泣く

5. 秋夜情譚

蟲は紙小刀もて夜の頁を截りすゝみ
 わが情念は翅のごとく書面に顫ふ
 夜のかなたに額縁の國あり
 月の光、微風とともに
 つとさし覗きて過ぎゆきぬ

6. 月光に浮ぶもの

處女ありて凭るわが胸の窓
 若者ありて唇吹くわが胸の閨
 われは術なく観ふのみ——
 處女みじろがす 射るよ眼眸
 笛いよ、冴えて 影動くよこみらに

7. 夜を訪ふもの

「かくも夜更けておとなふは誰ぞ」
 夜毎よごと、わが胸の扉にきて
 しのびかに覗くものあり
 いくそたび眼ざめて耳欬てけむ
 又しても款門のけはひ……

8. Silhouette

五月をゆく雲のごとくわが思ひに
 盈ちて揺りかゞやく像すがたあり
 心あはたゞしくまさぐりつゝ
 されど空しく俛首うなだれて目成まるのみ
 わが胸に住む君が影シルエット像

9. 送 迎

ひとの盟うまひは美し花
 零れてはかへり芽ふき
 又匂ふむかしのさまに
 誓ふなかれ摘むなかれ
 咲きては凋む戀と花

10. 悔

とほくわかれしひと
あなあやしこよひ
わがそばにすがゝく
おもふせてこえなく
—ふとかききえぬ

11. まぼろし

よきひとならば聲もあれ
まなざしならばかへし見む
くろきものに 目守られつゝ
こゝろ
空しくなりぬ

12 焦 燥

葉をうちて珠ときえちる

あまだれのをごゝろもがな

おもひ告げえでこもりゐる

翰林の子は

雨みつゝ

(以上一九二〇—二二)

古囊新愁

(愛語のためじ)

ふみよせず	たまづさを	なごかくは	愛敬 <small>あいきやう</small> の	かはしたる
ものたまはず	われに寄せざる	くちをつぐみて	あかしなりせば	きそのくちづけ

詩人

詩人よ少女

Er.

Eine Nacht, ach, hielt ich dich im Arme,
 Unter Küssen dich auf meinem Schosse;
 Ein Jasminzweig blühte dir im Haare,
 Kühle Lüfte kamen durch das Fenster.

Sie.

Heut im Bette, früh, es dämmert' eben,
 Lag ich in Gedanken an den Liebsten:
 Unwillkürlich küsst' ich, wie du küssest,
 Meinen Arm, und musste bitter weinen.

Still, o stille nun, ihr Morgenwinde !

Wehet morgen in der Frühe wieder !

— Ed. Mörike —

われひとり なやませたまふ
 おごれるや やさしきころ
 おごるとも なにかうらまむ
 わらへるや つたなきこの身
 わらふとも なにかくやまむ
 へりくだる われはしもべぞ
 ねがふらく たいにひとこと
 かはらじと わがむねふかく
 しのびかに 告げたまはずや
 ほしけやく 宣りたまはずや

詩人 (再び)

わがとりし きみがもろての
 殉愛の あかしなりせば
 などかくは われのみとほく
 うすすてゝ なげかせたまふ
 きゃなへて いまこそ七日なにか
 みじかけど われには千秋ちあき

きみがむね ほのほのなくば
 あゝなどか たけきくちもて
 あいせずと われにつげざる
 すてたりと かきもよせざる
 おろかにも われのみもだへ
 すべしらす けふも暮るゝか
 うらみににたるわがむねの
 つぶやきをきみ知るやしらすや

詩人 (みたび)

なみださしぐみ ひとりゆく
 はぐれがちなる せいしゆんの
 をぐらくながき もりかげに
 ふともみいでし あえかなる花

はなのわかさに よひしれて
 とざせるむねの よろこびに

ひとにもひめて つみかへり
うつしうえたり わがむねの庭

ひはうらゝかに あいのみづ
おもひをこめて はぐくめど
いろかうつらふ はなびらに
こゝろいたみて こゝのかをへぬ

なさけのうすき きみなりき
かれたるはなを いかにせむ

あゝわれかくて いまぞ知る
わがむねの庭 きみにふさはす

少女

あひみし日より きのふまで
やまひにふして 泣きわたり
やみてはあつき 身熱しんねつに
まさるまよひを なきわたり

ふたゝびみたび おんうたの
 わがまくらべを とひじより
 まどひえたへす 夕まけて
 きみおとづれぬ きのふけふ

さだめか否か むなしくも

訪うて主なき 歌机

旅にいづてふ ひとことの
 置手紙こそ かなしけれ

あゝわれ四とせ おん詩^{うた}を
 をとめごころに あくがれぬ
 つのるおもひは あさはかに
 きみおとなひし きぞのすえ

あゝゆくりなき いちべつの
 きみがおもひの こまやかに
 齡^{よはひ}二八を まもりてし
 くらびるをさへ わすれたり

さだめかなしきをとめかな
 ふたゝびひとをこひせじと
 ちかひしこゝろなげわすれ
 きみにまかせぬわがかいな
 ゆるしたまひねかつてわれ
 ひどをしたひてまぼろしの
 いまにわすれずこのむねに
 わきてみつるをいかにせむ

われどわが身をいましむる
 きづなふたゑをいかにせむ
 かほそきむねは血にそみて
 いらへもえせずなやみにき

あゝすべなきかいまははや
 うらぎりの子をゆるせかし
 悔ひしねる子をすてよかし
 のろはれし身はつちにうづめむ

詩人

きづつける胸をあらひて
 よみがへる歳をあらたに
 いきばやと旅にいでたる
 をのこはも久ひきにかへりて
 おどろきに將はたかなしみに
 きみがことばを嘆きうらみぬ

ふたゝびは見じと泣きたる
 みづくきの跡をしたへば
 ゆめにだに見じとちかひし
 まがふなき人のおもわの
 ふたゝびもうつゝに映はえて
 うつろのむねを搔きみだすかな
 あやしかる乙めごゝろよ
 愛なくば なぞおとづれし
 愛あらば なぞやわかれむ

ときがてぬひとのこゝろを
ときえむとさぐりみだるゝ

麻にもにたるをのこのおもひ

みつからの盟ひをわすれ

いまさらに情をぞ乞ふ

はぢしらぬをのこひとり

最後のこの願事ねがひごとぞ

「かくあつき炎のあらば

きみかへりませ更にひとたび」

少女

をどめごゝろを

せめたまふ

おんことのはの

わりなじや

こゝろをはなに

たどふれば

をとめごころは
みづからの
おもみにたえで
さしぐめる
ひまはりぐさの
かたおもひ
熱に身もだへ
ひもすがら
されどはるかに
したふのみ、めぐるのみ

*

ものいへば涙おつべしうつむきて
さけよとばかりくちびるをかむ

*

陽にめぐる花とも化^なりて目^ま守らばや
おもふがゆえに遠^{とほ}離^{さか}る身は

詩人

うつそみのわれをおもひつ

しかすがにまぼろしびとゆ
去りやらぬをとめごゝろを
かなしくもいまぞ解ひしたり

花となりわれをのがれし
さをとめをいまはた趁はじ
われもまた太陽アホともなり
空とほくきみをてらさむ

曇り日の雨ともなるを

おもひでの涙としらば
きみもまた奇しきえにしを
いとほしみかく泣きたまへ

さらばなりいちべつの戀
さらばなりひとふれの唇
わがおもひいまぞ断ちたり
さらばなりいくふしの歌

(完結)

Adieu !

(卒業の女生に代りて)

いつとせの泉を汲みて
 さまよひし森の出しほに
 ふりかへるわが足跡も
 なつかしき今は思ひで
 ふたたびは返らじその日
 ああさらばわがむらさきの服

「幻の森を離りて
 現世の妻ともなれば

堪えがてぬ春の惱みに
 ひとしれず涙ぬぐひし
 かなこみも知るやこの袖
 その涙かはきはつとも
 この思ひとはに忘れじ
 ああさらばわがむらさきの服

處女をさめ衣ぎぬいつかまた着きむ」
脱はぎなやむ襟えりにくちづけ
さらに湧わく永わ別かのなみだ
あゝあゝさらば紫むらさの服

戀である幻影

— 1919 —

充ち零れる心を張つて少年はいそいそと歩いてゐた。
かぐろい花粉のやうに、しめじめと濡れた汀の砂は、か
れの雌蕊のやうな蹠をしみじみと愛撫し、波は、搖籃を
ゆるやうな科をつくる波は、笑みかはしながら、口含り
ながら、かれの伸び曲る蹠にこころを籠めて接吻する。
時折、木犀いろのうす雲が何處からか駈けよつて、その
ふくよかな素絹の影で、少年の總身を羞らひ氣味に抱き
しめてはそつと振りほどいてまた何處かへ駈け去るのを
のぞいて、九月の太陽は目にみえぬ無数の白花を、惜し

げもなく、少年のあらはな顔と項と腓脚とに投げかけるのである。

少年は、かれらの愛をかんじてゐた。そして、双手を深く、軽い上衣アヤケツツにつきいれたまゝ、くりくりまろく持ちあがつた肩をすぼめて彼らの親和に身をゆだねるやうなしぐさに於て、歩いてゐた。

渚ははろばろと、涯はしもなく迂うねるのである。

何か探し求めるやうな、何かに呼びかけられたやうな、いらだち易いあこがれがちな眼差まなざしを落して、しかし充ち足りた思ひに矜まじりかに、少年は歩みつゝけた。どこかで

ぼゝゝゝ、うといふおどけた低聲音低い音のたるみがきこえた時、ふと眼を擧げて、遙かゆく手の河ぐちに吸ひ込まれてゆく小蒸汽船の黝くろづんだ煙突をちらと見守つたばかり少年はおとすともなく眼を落してゐた。

あるかなしの漣波が黒い砂地に絹絲のやうな條をいち面に彫りつけた淺洲をびちやびちやと渡つて行つた處である。糖菓キャンデーのやうな辨慶蟹が、身軀からだ不相應に大きな紅玉色の鉄をふり振り、砂をほぐらせて遁げ去つた跡に、班蛇のやうな海藻草が一片くれひからびてゐた。少年はどんらんに拾ひあげた。そして、瞬ひまりながら、まばたきながら

いぶかしげにその葉を翳して稍や斜の陽にすかせてみた
秘めやかに息づく碧と紫の葉脈、誘拐された異國の王女
の瞳におのゝく深緑のメラニコリエ——少年は思ひ寄る
未見の領土の幻想譚をちいと聴くやうであつた。信心深
い老嬢の髪粉のやうな珍らかな匂ひ、そして乾いたマル
メラードを想はせる神秘的な感觸……怪しい錯覺はゆく
りなく少年の胸に、ありし日の「オブリビオンの洋」に
濛ふ黒い船腹をもつた人買船の血色の颯雨火球を想ひ浮
ばせた。栗いろの瞳がさつと羞かんで、藻草をつまんだ
右手が波の上に急激な弧を切つて光る。りと明るく煌い

て散る藻草と、そしてまぼろしのやうに湛へられた太平洋の姿。

——朱いますとの人買船

——蠟いろの眸のマドロスと角砂糖

——黄金や銀の寶石箱と暗い明窓

少年は首をかしげた。こわい、けれど何といふ盡感にみ
ちた牢獄の幻影……

——護謨の轍に刻まれた白楊樹道の深み、その班光に見
え隠れする亞麻いろに幽びた尖塔の陰翳、圓みのある窓

は双眸。泪のやうにまつはる凌宵葛のノスタルヂア。天蓋を叩く風信旗のさはやかな羽搏き、そうして、果樹園の手前の廢れた温室。その日あたりのいゝ代緒の石階に壯年時代の憧憬がちな水先案内の目を夢みて居眠りしてゐる、あえかな老獄卒兼園丁の耳朶にからかふ海洋からの微風には、たつぷり融けこんでゐる七本檣の帆の唸りと熟れたザボンの耳語き。

(砂地獄の多い果樹園を抜けると、廣椽のやうな煙草色の綠壁だ) 少年は瞳の奥でしつかりと呟いた。

——横附にされたあの人買船、その物語りめいた舷と岩

壁に懸けわたす廢用の舟底板を稍にしならせて、色とりどりな上靴の音つつましく船から吐きだされる童子の群少女の群。小刻みに顫へるブロンズの羊髪。まほしげな金色の瞳孔、銀の眼、孔雀石の眸。カンナの蕾のやうに青ざめた唇片から、各國の言葉で響き洩れる傷ついた感動詞のもつれ。——

ふと、光をゆるがせる合掌のけはひに、見るとひとり白衣の處女と、麥藁色のジャケットの少年とが、しっかりと抱擁きあつてゐる太陽の眞下。新しい囚はれの犠牲を懐かしむやうに、憐むやうに、肩を組み、項を合せて、

祝福し祈願り歎歎く、しなやかな姿態！
少年は臉が熔けるやうに凝乎と噴め、心臟が眩暈する程
しんしんと見入る。

痙攣する肉片
戦き昂ぶる血脈

— 瞬間 —

爽かな翼打の階調が風を切つて耳もとをかすめた。はつ
と、吾に返つた少年は、其處に、さむさむとちろめく陽
炎の中に、肩を震はせて啜り泣く砂丘と、翔りさる一羽

の海鳥とを瞥た。

真青の天と水に一點白く浮動する其の後姿は、呼び招く
「唯一人」の幻影のやうに、いつまでも、いつまでも、
少年の瞳膜にちらついてゐた。

午前の愛撫了

終
詞

われ病めり斯く傷心いたつきに
たゞ一つ和らぐ術は
青春わかさよりわれを救へよ
歳長けて賢からまし

—A. Synons—

I
さういふ若さゆえの苦患がどんなに私をい
ちめつけた事か！一つの私が青春を歌ひ禮讚
し享樂すると同時に他の私は如何にそれを呪

ひ否定し叛逆したか。——否、悩み叛く事も或は享樂の一面であるかも知れぬ。私の純真な生長を遮り虐げたかの如く見ゆる該の苦惱も或は、そのために人の肉靈が必然な明暗と自然な皺と筋とを以て完成へと形造られる誰しもが負ふべき道程かも知れない。——然し餘りに痛ましくも淋しかつた春。われとわが心熱に焼け爛れた春。一日も速く遁れ免かれて理念と静觀との離屋に安住を希はしめた春。その春を今は漸く振り返り觀ることが可能るや

うな氣がする。(否、否、といふ聲がまだあるのか！)

朽ちたるものは

燃えてこそ美し

小兒が悲しみを唯ひたすらに母親の胸に獻^せげけるやうに、又、悶多い、若者が漸く見出した戀人の膝に、堰き切れた永い孤獨の涙を物も得言はず注ぐやうに、又は、あの人虚^ない山蔭に穴を掘り半生の告白を埋め去つて慰ひの忘却へと身を退いたといふ傳説のやうに、

そのやうに、私にとつてのこれら詩集は、その深い胸であり、任せきつた膝であり、又は白い葬りの土でもあらうか。

かのハルツライゼの詩人が自ら星と花とを以て天空に不滅の詩を書き遺したといふが如き稟才と情熱とを賦へられなかつた私には、寂しくとも、土を盛り花を生けさゝやかな里標を建て、通りすぎる若い人々の眼に同じ匂ひの涙をば映し出すことが可能れば、私の斯く在りし青春はせめて愛しく満ち足りて記念

されるであらう。

*

第一詩集「合掌の春」。「午前の愛撫」。今秋出版の「アダムの唄、第一界青春」。さうして來年の中に束ねらるべき新詩集とは、私の學生時代としての青春に於ける四重唱を構成するに相違ない。あの快朗な若さと生育と詩とのほか何ものも無いかのやうな向陵生活を謳つた「合掌の春」が思ひがけなく喪情の哀史として價值低くのみ記念されたとしても、彼女、

のソプラノを、どうして私の耳朶から抹す事が出来よう！「午前の愛撫」は、假令その轉機に於ける作品の中にこそ幾何かイデの混聲が聞かれるとはいへ、公平に且つ相應しくテノオル歌手に選ばるべきであらう。

今生れつゝある嬰兒たちが今の私たちの年齢に達する頃には、或は私も、「若い時には恁んなものも書いた」と法律事務所で苦笑する事がないとは限らないが、その淋しい述懐の裡にも最も堪えがたく懐かしく甦へつてくる

であらう響は、この青春の四重唱に違ひない。

*

幸か不幸か私は詩文に就いては師者を持たなかつた過去を振返らねばならぬ。私は唯、自然に付いて、事象に付いて、先人の文献に付いて不確かな足ごりを進ませるのみであった。然し、それらが、物こそ言はね手こそ把らね、人に於ては師父に勝るべきものとして自ら慰めては來たが、才貧しく意熱乏しい自分としては確かに寥しい一途であつた。

唯、數渺い畏敬する先達と、二三の若い友のみに私の *Milieu Poétique* は繞まれてきた。此詩集で私はそれらの人々に、その鼓舞と理解と映象との感謝のため、又孤獨の詩作時代の記念のため、幾らかの詩を贈り得る悦びを持つ。唯神經質な私を悞れしめる事は、若しもかの「幻像詩集」の著者がその青年期の作、「Advent」に依り當時著名の詩人達に捧げた詩篇に就いて云爲されたが如く、亦私の献詩がかゝる憂目に遭ふならば、かの場合のパウル

ゼンの護辯を俟たずとも、あのやうに目ざましい生長を約束した若いリルケの覆轍を踏む事を私は寧ろ欣快と心組まう。

*

最後に、私の失意時代に現れ、脚速い誘接と無言の叱勵とにより、その背の如く昂く、その人格の如く鞏かな投影を與へて、私をして更生の轉機に起たしめたところの敵手にして友、北村初雄氏と、及び、未名の私に、盛る花束の貧しさを感せしめる程の自由に美し

い籠を持たしめた純正美術社主、濤川榮氏と
に、心からの感謝を表したい。

大正十一年六月、原町の新居にて 健

大正十一年六月卅日印刷
大正十一年七月三日發行

(橋爪健詩集・午前の愛恋)
〔定價金壹圓八拾錢〕

版權
所有

著者	橋爪健	東京市小石川區原町十番地
發行者	濤川榮	東京市麹町區下二番町十四番地
印刷所	小鹽信三	東京市麹町區山元町二丁目二十番地

發行所

東京市麹町區
下二番町十四番地

九十九書房

電話四九段四一八八番
振替東京五五九〇〇番

小鹽印刷所印行

橋爪 健著作目録

- | | | |
|-----|---------|----------|
| 詩集 | 合掌の春 | 一九二二年一月版 |
| 詩集 | 午前の愛撫 | 一九二二年七月版 |
| 詩集 | アダムの唄 | 一九二二年十月版 |
| 譯詩 | 現代獨逸詩集 | 近刊 |
| 詩劇集 | 光惱まじき存在 | 近刊 |

506
162

終